

相談事例集

ぶらっとホームでの相談者に対する支援について、事例を通じて紹介する。事例1ではコロナ禍で仕事を失ったケース、事例2ではコロナ禍で自営業者が生活費や家賃の支払いが難しくなってきたケース、事例3では地域とのつながりを活かして就労支援を行ったケースを取り上げる。

事例1 コロナ感染症の影響で失業した元派遣社員の20代女性

概要	●本人(20代)のみの単身世帯。 ●大学卒業後、派遣社員として映像関係の仕事に従事していたが、コロナ感染症の影響により、失業。 ●これまで職場の人間関係で悩むことやストレスを強く感じるがあった。
相談経緯	●失業給付も終わり、インターネットで住居確保給付金の存在を知り、相談に至る。
主訴	●家賃の支払いと就労に関する相談。
支援内容と結果	<支援内容> ●本人の生活状況や家計状況を確認し、就職活動を行う上で、家賃の支払いが負担となっていたため、住居確保給付金を申請。 ●就労準備支援事業の社会生活自立プログラム(ぶらっとカフェ ガリレオ)への参加を提案し、社会参加の機会を増やす。 ●就労支援員のカウンセリングを受けながら、本人自身のキャリアやこれまでの職歴の振り返りを行い、強みを探る。 ●食料や生理用品の提供などを必要に応じて行う。 <支援結果> ●ぶらっとカフェ ガリレオに定期的に参加したことで外出することに慣れ、気持ちにゆとりが生まれた。 ●パソコンをはじめとした事務スキルを活かし、事務職で応募を検討し、採用に至る。 ●住居確保給付金を利用し、就職活動を支えた。
考察	本人が抱えていた人間関係のトラブルなどからくる不安やストレスをしっかりと受け止め、丁寧に寄り添い、その上で本人のペースを尊重しながら就労準備支援事業を活用して社会参加の機会を増やし、就労に向けた一歩を踏み出せたことが、その後の就職への契機となった。さらに、住居確保給付金の利用、食料支援や生理用品の提供などの支援も、本人が安心して就職活動に集中するために、上手く活用してもらうことができた。

事例2 新型コロナウイルスの影響で収入が減少した飲食店経営の70代夫妻

概要	●本人(70代)と妻(70代)の二世帯。 ●夫妻でお弁当中心の飲食店を経営しており、長年の顧客や取引先との関係を重視している。 ●引き続き飲食店を続けたい気持ちが強く、本人は従業員として働いた経験や就職活動の経験は乏しい。 ●年金は少なく、生活費と家賃の支払いが厳しい状況にある。
相談経緯	●コロナ感染症の影響でイベントや企業の会議などが減り、収入が減少した。 ●区報で住居確保給付金の存在を知り、相談に至る。
主訴	●飲食店の収入が減少し、生活費や家賃の支払いが苦しい。
支援内容と結果	<支援内容> ●家計相談を行い、収支の見える化を行い、赤字を無くすための経済的な見直しを検討する。 ●生活福祉資金(特例貸付)と住居確保給付金の申請。 ●飲食店を継続しつつ、就職活動も行う。 ●従業員としての経験の無さや高齢といった就労障害要因を踏まえ、求人開拓員が本人の強みである調理関係の仕事を開拓する。 <支援結果> ●就労支援員が、条件緩和などの交渉を企業側に行い、介護施設の調理スタッフとして採用された。 ●自営の飲食店も少しずつ回復傾向にあり、介護施設の仕事を調節しながら現在に至る。 ●生活福祉資金(特例貸付)と住居確保給付金を利用し、就労により収入が安定するまでの生活を維持することができた。
考察	コロナ禍で経営していた飲食店が影響を受けて生活困窮の状況に至ったが、就労に向けて本人がこれまで培ってきた飲食業のスキルや経験を活かし、従業者としての経験が乏しいことや高齢という就労に不利な条件を求人開拓という手法で補うことができた。個別の状況に合わせて求人を開拓し、就労支援を行うことの重要性を改めて認識した。 また、貸付や給付の活用を本人へ提案し、ただ単に本人の生活を安定させるだけでなく、本人が就労に前向きになれるように不安の軽減を図れたことが支援の重要な要素となっており、本人の気持ちも考慮しながら支援していくことの大切さを感じられた。

事例 3

就労訓練事業を活用して地域の民間事業所と連携して就労支援を行った20代男性

概要	<ul style="list-style-type: none">●本人(20代)と父親の二世帯●いくつかの仕事を経験するも職場に定着せず。●生活リズムが崩れている。●愛の手帳4度(知的障害)を所持。
相談経緯	<ul style="list-style-type: none">●複数の相談機関などを経て、相談に至る。
主訴	<ul style="list-style-type: none">●長く働きたい。
支援内容 と 結果	<p><支援内容> ●障害者年金申請を本人と検討。 ●就労準備支援事業の日常生活自立プログラムへの参加を通じ、外出機会を増やし、生活リズムを整える。 ●就労訓練事業を活用し、本人に適した職場を検討する。</p> <p><支援結果> ●障害年金を受給し経済的な基盤を確保した。 ●日常生活自立プログラムに定期的に参加し、生活リズムを取り戻していった。 ●就労訓練事業に参加し、ビジネスマナーを身に付け、積極的な言動が訓練期間中にみられた。 ●訓練期間中の勤務態度などが評価され、清掃業務(障害者雇用)での雇用を就労訓練事業所側から打診された。 ●ぶらっとホームの就労支援員が連携を取りながら、職場見学、職場体験、面接という段階を経て、採用が決定した。 ●採用後も就労支援員が定着支援を3か月間行い、支援終了となった。</p>
考察	<p>本人の興味関心を尊重した中で、就労訓練を受け、その振り返りを行うことで「自信」が付き、その経験が積み重なっていくことにより「やりがい」を感じて参加を継続することで、結果的に雇用へつながり、障害年金と合わせて自立することへ希望を持つことができるようになった。本人の意向と事業が担う支援とを適切に結びつけることが重要であると分かる。</p> <p>また、就労することだけを支援の目標にするのではなく、就労が継続するように、当初から支援終了後の生活を見定め、本人が新たに他者との関係や職場で悩みを抱えた場合にどのように対応すべきかなど、就労の場で起きる様々なことへの対応力を身に付けるよう意識して支援していくことも重要である。</p>

